

# 【7】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 121頁 からの引用)

爾時に仏告ふつごう 長老舍利弗ちやうろうしやりほつ

その時、仏、長老舍利弗に告げたまはく、

從是西方じゆうぜきほう 過か十じゆう萬まん億おく仏土ぶつど 有う世界せかい

「これより西方に、十萬億の仏土を過ぎて世界あり、

名曰極樂みやうわつごくらく。

名づけて極樂といふ。

其土有佛ごどうぶつ 号阿弥陀ごうあみだ

その土に仏まします、阿弥陀と号す。

今現在説法こんげんざいせつぽう。

いま現にましまして法を説きたまふ。

ことばの説明

從是西方じゆうぜきほう (じゆうぜきほう)

これより西方という意味です。何故西方なのでしょうか。お浄土を願おうとする私共が、心を傾けやすいように夕日の沈む西方を指定してくださったのであります。本当に地図上の西方に存在するのでないことは、いうまでもありません。

## 大意

その時、お釈迦様は長老の舍利弗に告げられました。ここより西方に十萬億の仏様の国を過ぎたところに世界がある。それは極樂といわれる。その世界には阿弥陀と申される仏様がおられる。そして今現在説法されているのである。

## 内容と味わい

お釈迦様のご説法は、人々の問いに答える形で始められるものです。それぞれの苦悩や疑問に合わせた説法をされるためであります。

しかしこの『阿弥陀経』は、どなたの問いも待つことなく、お釈迦様がお説きになられたお経です。何の前触れもなく舍利弗に向かつて「舍利弗よ」とはじめられるのであります。

問い無くして自ら説かれた經典ということ、「無問自説(むもんじせつ)の経」といわれており、お釈迦様が本当にお説きになりたかつた経、お釈迦様の御本意の経といわれております。お釈迦様がこの世において本当にお説きになりたかつたことという意味で出世本懐(しゅつせほんがい)の経ともいい、しめくくりの意味で一代結経(いちだいきけつきょう)ともいわれます。

さて、西方の彼方に極樂世界がましまして、そこで阿弥陀様が今現在説法をされているとお言葉です。今現在ということでは、まさに私共が『阿弥陀経』を拝読している今現在のことであります。仏教とは常に今この瞬間のわたくしを問題とするみ教えであります。

# 【8】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 122頁 からの引用)

舍利弗 しやりほつ 彼土何故 ひどがこ 名為極樂 みょういごくらく。

舍利弗、かの土をなんがゆゑぞ名づけて極樂とする。

其国衆生 こくにんしうじやう 無有衆苦 むいうしうく

その国の衆生、もろもろの苦あることなく、

但受諸樂 たんじゆしよらく 故名極樂 こみょうごくらく。

ただもろもろの樂を受く。ゆゑに極樂と名づく。

ことばの説明

極樂 (ごくらく)

阿弥陀様のお浄土のことです。『正信偈』には「安養界」あるいは「蓮華蔵世界」とも申されています。

衆苦 (しゆく)

あらゆる苦しみ。この娑婆世界の苦しみの原因をつきつめていくと、無明(むみょう)にいきつきます。無明とは眞実を知らぬことであり、煩惱の最も根源的なものであります。

諸樂 (しよらく)

もろもろの樂のことです。これはこの世の楽しみではありません

ん。仏様と共に仏法を味わう楽しみであります。

大意

舍利弗よ、何故その世界を極樂と名付けるのであろうか。

その世界の衆生はもろもろの苦がなく、

もろもろの樂を受けるのみである。

だからその世界を極樂と名付けるのである。

内容と味わい

お釈迦様は、かの世界は一切の苦がなく樂のみであるから極樂と申すのであると説かれます。ここでよく考えねばならぬのは、お釈迦様の仰る「苦」と「樂」の内容です。お釈迦様は悟りを得られたとき、生まれ変わり死に変わりする輪廻(りんね)的生存は「苦」であると見極められました。そしてその根本原因は無明(むみょう)であるとされました。無明とは眞実を知らぬことであります。極樂において苦が無いとは、煩惱が滅しくされていることを指します。

続いて「樂」とは何でしょうか。今私たちが考えるような楽しみのはずはありません。煩惱を滅した衆生はすなわち仏であります。仏様は仏法を味わい、一切衆生を救うことが楽しみであります。

【9】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 122頁 からの引用)

又舍利弗 極樂国土 七重欄楯

また舍利弗、極樂国土には七重の欄楯・

七重羅網 七重行樹。

七重の羅網・七重の行樹あり。

皆是四寶 周匝圍繞。

みなこれ四宝周匝し圍繞せり。

是故彼国 名曰極樂。

このゆゑにかの国を名づけて極樂といふ。

ことばの説明

七重欄楯(しちじゅうらんじゆん)

欄楯とは欄干のことです。欄干が七重になっていることです。

七重羅網(しちじゅうらもう)

羅網とは寶石をちりばめた網飾りのことです。羅網が七重になっていることです。

七重行樹(しちじゅうごうじゆ)

行樹とは並木のことです。並木が七重になっていることです。

四宝(しほう)

金・銀・瑠璃・玻瓈の四種類の宝のことです。

周匝圍繞(しゅうそういによう)

周囲を囲まれているという意味です。

大意

また舍利弗よ、極樂には七重の欄干、宝珠で飾った七重の網飾り、七重の並木があり、すべて四宝で出来ている。それらによって周囲が囲まれている。そのゆゑに極樂というのである。

内容

これからお浄土の有様がとかれることになります。お浄土の素晴らしく麗しいたたずまいを、極樂の莊嚴(しょうごん)といいます。

仏教の世界観では、世界の様子を二種類に分けて表現いたします。お浄土に関しましても同じことがいえます。

一、お浄土のありさま、言いかえればお浄土の環境と表現できます。

二、お浄土に住まわれる方々のありさま。

ここからはまず、お浄土の環境について説かれるわけでありませう。

お浄土に住まわれる方々につきましては、のちほど説かれることになりませぬ。

お浄土のすがたは、浄土三部経の一つ『大無量寿経』の中で、法蔵菩薩様が誓われた四十八の誓願の成就された姿であります。今回の一節もまたそうです。お浄土の姿が誓われた願はいくらかございますが、たとえば第三十二番目の願があげられます（ここでは省略させていただきます）。願だけではなく、『大無量寿経』のお経文の中にも、お浄土のすがたがよりくわしく説かれてございます。

ところでお浄土はなぜ数々の宝で飾られているのでしょうか。お浄土は四十八願に誓われたすがたですから、仏様のお悟りの内容であります。お悟りの世界に、この娑婆世界のような金銀財宝があふれているのでしょうか。物欲が満たされるから、楽しみの極まりということ極楽というのでしょうか。そんなはずはありません。

お悟りそのものは、私どもの想像のおよぶものではありません。私たちの言葉で表現できる境地でもありません。お悟りとは、真実そのものであり、それは親鸞聖人が御著書『唯信鈔文意（ゆいしんしょうもんい）』の中でおしめしくださっております。

「いろもなし、かたちもまします。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり」（注釈版聖典 709頁）と申されるのです。つまり、色も形もなく私共の心で思うことも、言葉で表

現することもできないということですか。

そのような世界に生まれたいと願わせるにはどうすればよいでしょうか。当時のインドの人々が憧れをもって想像する世界を想定した上で、お浄土はそのような世界とも比べものにならないくらい素晴らしい世界であると説くことで、お浄土に心をむけさせようとされたのではないのでしょうか。

しかしながら、お経のお言葉を私共がああでもない、こうでもないといふ小賢しく解釈するのはよくないことであります。

法然聖人はお経のご文をご解釈されるときに、「聖意（しょうい）はかりがたし」（『選択本願念仏集』の一節でございます）と述べられます。聖意とは仏様のみこころです。

親鸞聖人は「仏意測りがたし」（『教行信証』の一節でございます）と述べられております。つまり、仏様のおこころは私ごときが知ることではできぬということでありませぬ。知ることではできないが、おそれながら推測申し上げてみますと、このようなことではないだろうかといふ見解を述べられるのであります。

どこまでもお経のお言葉に謙虚にむきあう姿勢をくずしてはならないと存じます。

私どもが、お浄土のお姿について、あれこれ考えても詮無きことです。結局、お浄土にお参りさせていただいた時にお浄土の様子はわかるのです。学問上の考察は意義深いことですが、私どもはお経に説かれてあるお浄土のようすを心に思いつつ、お念仏申すのが阿弥陀様のみこころにかなうことではないでしょうか。

【10】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 122頁 からの引用)

又舍利弗

また舍利弗、

極楽国土 有七宝池 八功德水 充滿其中

極楽国土には七宝の池あり。八功德水そのなかに充滿せり。

池底純以 金沙布地。

池の底にはもつぱら金の沙(すな)をもつて地に布けり。

四辺階道 金銀瑠璃 玻瓈合成。

四辺の階道は、金・銀・瑠璃・玻瓈合成せり。

上有楼閣 亦以 金銀瑠璃

上に楼閣あり。また金・銀・瑠璃・

玻瓈碑磔 赤珠碼碯 而嚴飾之。

玻瓈・碑磔・赤珠・碼碯をもつて、これを嚴飾す。

池中蓮華 大如車輪。

池のなかの蓮華は、大きき車輪のごとし。

青色青光 黄色黄光 赤色赤光

青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、

白色白光。微妙香潔。

白色には白光ありて、微妙香潔なり。

舍利弗 極楽国土 成就如是 功德莊嚴。

舍利弗、極楽国土には、かくのごときの功德莊嚴を成就せり。

ことばの説明

七宝(しつぽう)

金・銀・瑠璃・玻瓈・碑磔・赤珠・碼碯の七種の宝のことです。

八功德水(はつくとくすい)

お浄土あるといわれる八種の優れたはたらきのある水です。

八種のすぐれたはたらきとは

水が澄みきっていること。

水が清く冷たいこと。

水が甘くおいしいこと。

水がかかるくやわらかいこと。

水がよくうるおうこと。

水がおだやかであれないこと。

飲めば渴きがいやされること。

飲むと健康が増進されること。  
以上のようなはたらきであります。

#### 金沙布地（こんしゃふじ）

七宝の池の底には金沙が敷き詰められているということです。

#### 四辺階道（しへんかいどう）

七宝の池の四辺には出入りできるように階段があるということです。これはこの池が沐浴施設であることをあらわしています。

#### 上有楼閣（じょうろうかく）

七宝の池の岸には楼閣があるということです。この楼閣もまた七宝をもって飾られているのです。

#### 池中蓮華（ちちゅうれんげ） だいによしやりん

七宝の池の中には、車輪のように大きな蓮華が咲き誇っているということなのです。

#### 功德（くどく）

善い行い、または善い行いの結果、得られたすぐれたはたらきのことです。このようなはたらきを功能（くうのう）といいます。『阿弥陀経』では、法蔵菩薩様の修行のすえに達成された四十八願のはたらきのことと理解すればよいでしょう。お名号のはたらきです。

#### 莊嚴（しょうごん）

美しく飾られていることです。お浄土は、阿弥陀様の四十八の願がすべて成就されたすがたであります。願が姿となってあらわれているので、このことを願心莊嚴（がんしんしょうごん）といいます。

すなわち、すべてのものを分け隔てなく救いとるという優れたはたらきが、お浄土のすがたとなってあらわれているのです。そのことを成就如是功德莊嚴とお説きになっておられるのです。

#### 大意

また舍利弗よ、極樂には七宝の池があり八功德水が満ちている。その池の底には金沙が敷き詰められている。

その四方には宝で出来た階段がある。

そして岸の上には七宝で飾られた楼閣がある。

池には車輪のように大きな蓮の花が咲いている。

青色は青く光り、黄色は黄に光、赤色は赤く光り、

白色は白く光っている。

そして麗しき香が漂っているのである。

舍利弗よ、極樂はこのような素晴らしき姿である。

#### 内容と味わい

極樂の莊嚴は『大無量寿経』の四十八の誓願が成就された姿であります。阿弥陀様の悟りの顕現です。悟りの世界でありますから、どのように説明したところでかなわぬところがあります。極樂の莊嚴のひとつひとつが悟りのあらわれということとは、そのどれもが衆生救済のはたらきをもつものであります。

【11】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 122頁 からの引用)

又舍利弗 彼仏国土 常作天楽。

また舍利弗、かの仏国土には、つねに天の楽をなす。

黄金為地 昼夜六時 而雨曼陀羅華。

黄金を地とし、昼夜六時に天の曼陀羅華を雨らす。

其国衆生 常以清旦 各以衣祴

その国の衆生、つねに清旦をもつて、おのおの衣祴をもつ

て、盛衆妙華、供養他方十万億仏。

もろもろの妙華を盛れて、他方の十万億の仏を供養したてまつ

る。

即以食時 還到本国 飯食経行。

即ち食時をもつて本国に還り到りて、飯食し経行す。

舍利弗 極楽国土 成就如是 功德莊嚴。

舍利弗、極楽国土には、かくのごときのご功德莊嚴を成就せ

り。

ことばの説明

彼仏国土(ひぶつこくど)

阿弥陀様のお浄土のことです。

常作天楽(じょうさてんがく)

つねに麗しい音楽が流れているということです。

昼夜六時(ちゅうやろくじ)

昼を晨朝・日中・日没、夜を初夜・中夜・後夜と分けるので昼夜六時といえます。よつて昼夜六時とは二十四時間ということです。

曼陀羅華(まんだらけ)

天の花のことです。黄金の大地につねに曼荼羅華が降り注いでいるのです。

清旦(しょうたん)

清旦とは清々しい朝のことです。

衣祴(えこく)

花かごのこと。

供養(くよう)

供給資養(くきゆうしよう)ともいいまして、仏法僧などに供物をささげることです。

## 飲食（ぼんじき）

食事のことです。お釈迦様時代の仏教教団では食事は朝から正午までとされていきました。

## 経行（きょうぎよう）

「きんひん」とも読みます。散策のことです。

## 大意

舍利弗よ、極樂では常にすばらしい音楽が鳴り響いている。地面は黄金で出来ており、一日中曼陀羅の華が降り注いでいる。極樂の衆生は、清々しい朝に花かごに華を盛って十億の仏土の仏様方を供養申しあげる。そして食事時には極樂に戻ってきて、食後は散策されるのである。舍利弗よ、極樂はこのようすばらしい姿が成就されているのである。

## 内容と味わい

お浄土では、常に美しい音楽が鳴り響いており、黄金の大地には常に曼荼羅の華が降り注いでいると説かれます。そして、あらゆる仏様方を供養申し上げると説かれます。この様子は『大無量寿経』の四十八願のうち、たとえば第二十三願（供養諸仏の願）や第二十四願（供養如意の願）が成就したすがたでありましょう。

第二十三願は、お浄土の人々が、一回の食事くらいの短時間で無数の諸仏の国に至って、諸仏を供養できないようなら、仏には

ならぬとあります。

第二十四願には、お浄土の人々がのぞみのままに供養できなければ仏とはならぬとあります。

これらの願が成就されましたので、清々しい朝には、食事前に無数の諸仏方をのぞみのままに供養申し上げることができけるわけです。

また極樂の衆生は食事のあとは散策されるところ。とお浄土の食事とはどのようなものでしょうか。

七祖のお一人天親菩薩様が『浄土論』（注釈版 七祖篇 30頁）のなかで次のように説かれておられます。

「仏法の味はひを愛樂し 禅三昧を食となす」

娑婆世界のような食事をすることは、いのちを奪うことであります。お浄土においてそのようなことのあるはずありません。仏法を味わい禅定することがお浄土のいのちであります。

また七祖のお一人曇鸞大師様は『浄土論』のこの一節を『往生論註』（注釈版 七祖篇 120頁）に解説されまして、

「仏願に乗ずるをわが命となす」  
とも仰せになりました。

お浄土が阿弥陀様のねがい成就された世界であるならば、そこに生まれるものは阿弥陀様のねがいによって生かされているのであります。そしてこのような世界の中で仏法を味わい、衆生救済に携わることがお浄土のいのちであります。



【12】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 123頁 からの引用)

復次舍利弗

また次に舍利弗、

彼国常有 種種奇妙 雑色之鳥。

かの国にはつねに種々奇妙なる雑色の鳥あり。

白鵠孔雀 鸚鵡舍利 迦陵頻伽 共命之鳥。

白鵠・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の鳥なり。

是諸衆鳥 昼夜六時 出和雅音。

このもろもろの鳥、昼夜六時に和雅の音を出す。

其音演暢 五根五力七菩提分八聖道分 如是等法。

その音、五根・五力・七菩提分・八聖道分、かくのごとき

らの法を演暢す。

其土衆生 聞是音已

その土の衆生、この音を聞きをはりて、

皆悉念仏 念法念僧。

みな悉く仏を念じ、法を念じ、僧を念ず。

ことばの説明

白鵠・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命之鳥

極楽にいる六種の鳥の名称です。

五根・五力・七菩提分・八聖道分

仏教における修行方法を分類整理したものに、三十七道品というものがあります。名前だけあげますと、

四念処(しねんじょ)の四種類

四正勤(ししようごん)の四種類

四如意(しにょい)の四種類

五根(ごこん)の五種類

五力(ごりき)の五種類

七菩提分あるいは七覚支(しちかくし)の七種類

八正道(はっしようどう)の八種類です。八正道は八正道とも書きます。以上の三十七種類です。

ここでは有名な八正道について説明してまいります。

八正道とは

・正見(しようけん)正しい見解

・正思(しようし)正しい思惟

・正語(しようご)正しい言葉

・正業(しようごう)正しい行い

・正命(しようみょう)正しい生活

・正精進(しようしようじん)正しい努力

・正念(しようねん)正しい思念

・正定（しょうじょう）正しい禅定  
これらの八つの修行を実践することによって、悟りを得るのであります。

### 念仏念僧念法（ねんぶつねんそうねんぼう）

仏・法・僧とは三宝（さんぼう）とも呼ばれます。

仏とはブツダであり、法とはブツダの教えであり、僧とはブツダの教えに随順し実践する人々の集まりであります。

この三宝が揃ってはじめて仏教であります。三宝とは、悟りの世界から現れでてくるものであります。この娑婆世界にいきるものにとって心よりどころとなるものです。み仏の御教えを心よりどころとして生きることが仏様の願であります。

また、三宝に帰依することが仏教徒のすがたなのです。帰敬式でと見える三帰依文をご存じの方もおいでだろうと存じます。

南無帰依仏

南無帰依法

南無帰依僧

であります。

### 大意

また舍利弗よ、

極楽には様々な色の鳥がいる。

白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の鳥の六種の鳥である。

これらの鳥は一日中雅な声音で啼いている。

その啼き音は五根・五力・七菩提分・八聖道分の仏法を説かれる

のである。

この啼き声を聴いた者は  
みな仏法僧を深く念ずるのである。

### 内容と味わい

お浄土では様々な鳥が仏法を説き述べているというのであります。前回にも申しましたが、お浄土の姿は、『大無量寿経』の四十八願が成就された姿であります。阿弥陀様のお悟りのあらわれであります。

七祖のお一人曇鸞大師様はその御著書『往生論註』の中で、お浄土の莊嚴の一つ一つについて「仏事をなす」とあかされました。お浄土の莊嚴のひとつひとつは、悟りのあらわれでありますから、仏様のお仕事をなさるといのであります。つまり衆生救済にあたるというわけです。

お浄土を飛び交う鳥々にもおなじことがいえます。鳥の啼き声一声一声が仏法を説き述べているのであります。そしてその声を聞いたものは、三宝を深く敬い念ずる心が弥増するのであります。お浄土で仏となられたからこそ、なお一層仏・法・僧に対する敬意と感謝のところが深まるのであります。

【13】の御経文 正宗分

読み方 (注釈版聖典 123頁 からの引用)

舍利弗

舍利弗、

汝勿謂此鳥 實是罪報所生。

なんぢこの鳥は実にこれ罪報の所生なりと謂ふことなかれ。

所以者何 彼佉国土 無三惡趣。

ゆゑはいかん。かの佉国土には三惡趣なければなり。

舍利弗 其佉国土 尚無三惡道之名

舍利弗、その佉国土にはなほ三惡道の名すらなし。

何況有實。

いかにいはんや実あらんや。

是諸衆鳥 皆是阿弥陀仏

このもろもろの鳥は、みなこれ阿弥陀仏、

欲令法音宣流 變化所作。

法音を宣流せしめんと欲して、變化してなしたまふところなり。

ことばの説明

罪報所生(ざいほうしよしょう)

仏教では生まれかわり死にかわりするいのちの世界を六道(ろくどう)で説明いたします。六趣(ろくしゆ)ともいいます。

上から天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄といえます。これらの世界は自らの行いによってひらかれてくる世界であります。自らのおこないを業(ごう)といいます。自らの行為の結果は自らが引き受けるのであり、自業自得といわれるのはそのことです。そのことを罪報所生といわれたのです。

三惡趣(さんまくしゆ)

上の天・人・修羅を三善道あるいは三善趣といい、下の畜生・餓鬼・地獄を三惡道あるいは三惡趣といいます。

大意

舍利弗よ、

極樂の鳥々は罪の酬いとおもつてはならない。

なぜならば極樂には三惡趣はないからである。

舍利弗よ、極樂には三惡趣の名前すらないのである。

いわんや実体としての鳥などいようはずもない。

この鳥は阿弥陀様が

衆生に仏法を説き述べるために姿を変えられたものなのである。

内容と味わい

極樂の莊嚴に鳥が出てきますが、鳥といえは畜生に分類されま

す。悟りの世界に何故三悪趣である畜生がいるのでしようか。まず、お浄土に三悪趣があるかどうかという点、いないのです。そういえる根拠は『大無量寿経』の四十八願の中の第一番目の願にあります。第一願を無三悪趣（むさんまくしゅ）の願と申します。お経文を掲げますと、

第一願（無三悪趣の願）

お経文

読み方（注釈版聖典 15頁からの引用）

設我得仏、国有地獄・餓鬼・畜生者、

設ひ我仏を得たらんに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、

不取正覚。

正覚を取らじ。

正覚（しようがく）とは阿弥陀様のお悟りのことであります。この願の意味は、もしお浄土に地獄・餓鬼・畜生の三悪趣があるようならば私は決して阿弥陀仏とはならぬというのであります。

ところで阿弥陀様は全ての願を成就されて仏となられているのですから、お浄土には三悪趣は無いのであります。ですからこれらの鳥々は三悪趣の鳥ではないのです。罪の報いによって鳥と生まれたのではないのです。このことを「罪報の所生とおもうことなかれ」と『阿弥陀経』には説かれてあるわけです。

それでは、お浄土の鳥とはなにものでしようか。『阿弥陀経』によりますと、この鳥々は衆生に仏法を説き述べるために、阿弥陀様が姿を変えたものであるというのです。

次の段にも出てまいりますがお浄土のすがた一つ一つが、衆生救済のはたらきをもつのです。阿弥陀様はあらゆる手立てをもつて衆生救済にあたられるのであります。

ところで、仏教とは悟りを開くための教えであります。そのために仏教では常に今この瞬間の私のあり方を問題にいたします。なぜなら、今この瞬間のわたしの行い、なかでも心のありかたが、次の瞬間の私のありかたに大きく関係するからです。「行い」といつて心で思い考えることも含まれるのです。

仏教の修行というのは、悪をとおざけて善をこころがける瞬間の積み重ねといえます。親鸞聖人は『教行信証』の中で、法蔵菩薩様が無限ともおもわれる御修業の最中、その行いは一瞬たりとも清浄でないときはなかつたとお示しでございます（注釈版聖典 231頁）。

ひるがえって私共はよこしまな考えの浮かばぬ瞬間はないといつてもよいでしょう。到底仏道修行の及ばぬ身であることが思い知らされます。そのような私共の代わりに御修行あそばされ、その功徳をすべて私どもにふりむけて下さったのが、お念仏でございます。